

てんまつてんじん



涼風進上

令和元年 盛夏

天皇陛下御即位奉祝行事……………	2 頁
「どんどこ船」府無形民俗文化財に……………	7 頁
光格天皇と大阪天満宮……………	8 頁
名誉宮司回顧録 ②……………	12 頁
「星合之池」石碑奉納……………	14 頁
英国首相御来宮……………	15 頁

天皇陛下御即位奉祝祭

五月一日午前十時、御本殿において
踐祚改元奉告祭、並びに御即位奉祝祭
が、宮司以下神職によって大祭式をも
つて斎行されました。

祭儀には寺井種伯名誉宮司以下神社
総代、氏子崇敬者・講社の代表や、天
神祭渡御行事保存協賛会役員など六〇
名余りが参列しました。

次第では修祓、宮司一拝について雅
楽の伴奏によって、宮司以下祭員参列
員全員で国歌「君が代」を奉唱し、次
ぎに御扉を開き奉つて献饌、宮司の祝
詞奏上があり、神楽「浦安の舞」が奉
納されました。その後、宮司、参列者
が玉串を奉つて拝礼し、本殿での祭儀
は滞りなく斎行されました。

祭儀の後の直会場では大型のテレビ
モニターが設置され、まず宮司、名誉
宮司の挨拶があつて、「即位後朝見の
儀」の放映を拝見することになりました。
天皇陛下のお言葉を拝聴して儀式
は終了し、会場ではまず太鼓中の西川
輝彦総代の先導によって「聖寿万歳」
を奉唱し、氏子総代の藤尾政弘様の発
声によって乾杯が行われ開宴となりました。



和やかな歓談の後、再び西川総代の
発声によって「大阪締め」がおこなわ
れ盛況のうちに開きとなりました。

●境内の奉祝行事

当日は本殿の祭儀に続いて様々な
奉祝行事が行われ、午後からの雨模
様にもかかわらず境内はたくさんの方
の参拝者で賑わっていました。

午後十一時から氏子青年会と天満
宮スカウトの奉仕によって、餅つき
と振る舞い餅、鏡開きと振る舞い酒



が行われ、本殿西側では大起水産株
式会社の奉仕による本マグロの奉納
調理式が実演され、併せて鮪の販売
も行われました。

午後二時から本殿内において上
方落語協会の奉仕によって「寄席囃
子」の演奏解説、落語一席と祝儀舞
として「松づくし」が演じられまし
た。

午後三時から本殿において当宮
の神職、巫女による雅楽、神楽の奉
納を行いました。曲目は雅楽演奏に
よる「国歌 君が代」、平調「越殿
楽」、神楽舞として浪速神楽「庭の



舞」、祭祀舞「浦安の舞」、浪速神
楽「鈴扇」が奉納され、この神楽舞
には当宮の神楽教室の生徒も多数奉
仕しました。

この行事の他に境内には奉祝記帳
所も設置され多くの方に記帳いただ
き、特別記念「令和」の朱印色紙
(数量限定)の授与なども行われまし
た、おりしも昨今の朱印ブームの
ためか、臨時の御朱印所は長蛇の列
となり、最後尾は本殿の北側に四重
の列ができてしまいました。なかには
二時間半も並んだ方もおられたよ
うで、夜の八時前まで参拝者がおら
れ、さながらお正月のような境内風
景となり新しい御代を寿ぐ賑々し
い一日となりました。



令和元年

天神祭行事案内

● 22日(月)
13時 伏見三十石船 宮入
● 23日(火)
11時 御羽車講 巡幸
12時 発輦祭
15時 四條司流儀式庖丁奉納
15時 ギャルみこし 宮入

● 24日(水)宵宮(よみや)
7時45分 宵宮祭(本殿内)
8時50分 鉾流神楽鉾流橋北詰
16時 催太鼓 氏地巡幸
16時15分 どんとこ船 宮入
神鉾奉還

● 25日(木)本宮(ほんみや)
13時30分 本宮祭(本殿内)
15時30分 陸渡御列 出門

18時 船渡御列 発進
19時30分 20時50分 奉納花火



19時30分 天神祭北新地巡幸



19時 催太鼓 宮入
19時30分 天神講獅子宮入



21時 催太鼓 宮入
22時 還御祭

地車を生んだ天神祭

モデルは豪華絢爛の川御座船

玲月流初代 篠笛奏者 森田 玲

地車は、天神祭を発祥とし大坂三郷域の夏祭で発達した神賑(かみにぎわい)行事の練物である。摂河泉を中心に、瀬戸内、九州の中津にまで伝播して、伝わった先々で独自の発展を遂げた。その出自は川御座船(かわござぶね)である。江戸時代に御座船と言えは幕府や西国大名が所有した豪華絢爛の関船を指し、航海用の海御座船と、大坂と京都を結ぶ淀川で用いられた川御座船があった。

天神祭では、御座船を様々な形で祭の中に採り入れて遊んだ。例えば、御迎え人形を乗せた御迎船は御座船を模したものである。『守貞謄稿』には「精製の仏壇のごとし」『芦の若葉』には「大名の船になぞらへるなりとぞ」と記される。御座船を陸で曳くという発想で造られたのが「天神丸」で、船体は海御座船の、屋形は川御座船の特徴を備える。そして地車。『喜遊笑覧』には「難波にて陸地を車して牽するものを壇尻と呼も、原(もと)天満祭礼に船を飾りしをへ中略」台尻といひしが、転がりて詛れるべし」とある。壇尻(地車)

の名称が天神丸のような船型曳車の名称の転訛であるとし、地車と船との強い関連性を示唆する。天神丸のような御座船型曳車から船体を取り除けば地車になる。地車には「和船の記憶」が多く残る。

(1) 古い形態の地車には波柄の胴掛幕が巡らされる。これは、地車が水に浮かぶ船であることを如実に物語る。岸和田の地車は幕部分が彫物となったが、その下部には水板と呼ばれる波柄の彫刻が組み込まれる。

(2) 上下二段に欄干が設けられる地車が多い。二階建て構造は川御座船の大きな特徴である。

(3) 「天満祭地車宮入の図」に風見の吹流と船印を持った人物が描かれる。吹流や旗印を立てる地車は多い。

(4) 中津(大分県)の祇園車(地車)の舵棒は、面舵、取舵、良候の船言葉で舵取りの指示がなされる。岸和田の地車の後艇子にはドンスと呼ばれる細引の綱が張られる。ドンスは和船用語である。

(5) 神戸の東灘の地車では采配を、岸和田の地車では団扇を採って地車

の屋根に乗る。これは川御座船の屋根に乗った采配役に相当する。

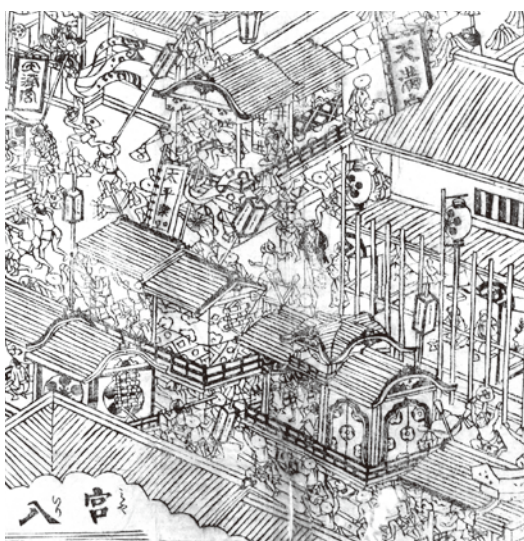
地車の出自は船であり、とりわけ川御座船の影響が大きい。地車は、おおよそ「川御座船の屋形部分を模した曳車」と定義できよう。

天神祭の地車講(天満市場)の地車は、現在主流の二ツ屋根地車と比して三ツ屋根地車と通称されるが、三ツ屋根の方が川御座船らしさが出る。

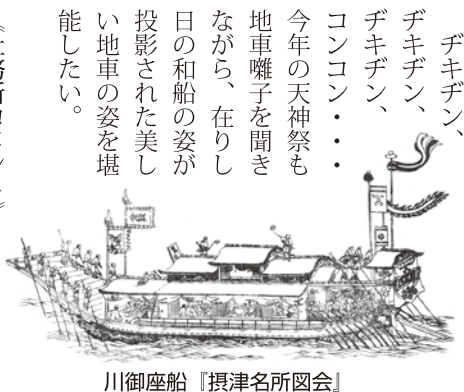
江戸時代には地車食物屋があった。二ツ屋根が主流となったのは費用対効果のためであろう。一ツ屋根は安上がりだが川御座船の雰囲気が出ない。二ツなら、三ツに及ばずとも、といったところか。

各地の祭で曳行される膨大な数の地車。その出自を知る手がかりとなる大阪天満宮の御迎え人形や天神丸、そして三ツ屋根地車は、天満宮の氏子崇敬者にとってはもちろん、地車文化圏全体にとっても貴重な文化遺産である。

地車



天満祭地車宮入の図
(大阪府立中之島図書館)



川御座船『摂津名所図会』

デキデン、デキデン、コンコン・・・今年天神祭も地車囃子を聞きながら、在りし日の和船の姿が投影された美しい地車の姿を堪能したい。

《社務所コメント》
本稿は、森田玲さんから投稿いただいたものをそのまま掲載しています。地車研究の素材とお考え下さい。

御羽車講七十年記念御修繕

去る七月二日、御本殿において天神祭に奉仕する御羽車講の結成七十周年を記念するとともに、天皇陛下御即位奉祝の意も合わせて、御羽車の御修繕完了奉告祭が斎行されました。

御羽車講は、昭和二十四年に天神橋筋商店街二丁目〇六丁目が天神祭に供奉するため結成された講で、滋賀県の日吉大社から奉納された御羽車を奉戴して天神祭の渡御に奉仕し始めてから、今年が七十周年の佳節となります（本誌29号参照）。

◆御修繕の内容

そこで御羽車の本体木部の塗装をはじめ、飾り金具の取り替え、屋根部分の錦布の張替え、擬宝珠の金箔押し、御帳四面の新調など本体全体について点検修繕が計画され、これに併せて渡御中に使用する講の旗や幟、高張提灯など関連する諸用品も修理新調が行われました。



◆奉告祭三日

修繕にあられた装束司の斎藤専商店（京都市）から二日の午前中に納品され、本殿前に据え付けた後に同社の丸橋春樹氏の説明のもと、田中誠一講元以下役員が点検確認を行いました。

そして午後三時から寺井種治宮司、寺井種伯名誉宮司も参列して厳肅に七十周年の奉告祭を斎行し、記念撮影の後は、天満宮会館において祝賀の直会が催されました。

講の結成以来全面的な修繕は今回が初めてとあつて当初の姿にもどった御羽車は威厳のある見事な御輿に蘇りました。今年の天神祭には装いも新たになった御羽車の擬宝珠が一際美しく輝いて、拝観の皆さんを魅了することでしょう。

【御羽車】①宮中の内侍所（賢所）の遷幸用の乗り物、②諸社の遷座の際に御霊代をお遷しする乗り物をいいます。

指定と相成り、これまでの活動が、記録伝承すべきものとして評価されましたことは、誠に喜ばしく、その思いをこれからも老壮若相和し響き合い、ご社頭の隆昌につながることを祈念してやみません。

●記録選択資料の要旨

「どんどこ船」は、天神祭において「なにわの川筋」を縦横無尽に漕ぎまわり、太鼓と鉦で祭の到来を告げるほか、重要な行事に関わるとともに、その掛け声と独特な漕ぎ方を伝承する手漕ぎ船として天神祭に欠かせない存在となっています。競漕もしていた「どんどこ船」の行事は、江戸時代から天神祭と密接な関係を持ち、戦乱等による度重なる渡御の中断を乗り越えて今に伝えられています。

●由来及び沿革

どんどこ船のはじまりについて明確な記録は無く、明治維新や太平洋戦争による渡御の中断もあり、その成り立ちについては定かではありません。現在、わかっている最も古い資料として、天保九年（一八三八）の文献資料（注①）に「どんどこ舟」や「どんどこ連中」の記載があることから、少なくとも江戸時代末頃には存在していたようですが、当時の

催太鼓 古儀復興

◆太鼓中総代のご相談

本年の天神祭では太鼓中による太鼓の直乗りを再興いたします。

ことの起こりは、昨年の天神祭の後に、太鼓中の西川輝彦総代と役員の方々から、明年の天神祭には踐祚改元の記念企画ができないかとのご相談があつたことに始まります。

皆さんのお話を伺ううちに往古の天神祭宵宮には「催太鼓は拝殿から昇きはじめた」という伝承の再興をご希望されていたので、祭儀部と文化研究所で史料を探しましたが残念ながら見つかりませんでした。

◆伝承の解釈

弘化二年（一八四五）の造営になる現在の拝殿は



そこで本年の天神祭宵宮ではこの伝承を復興するために、総代と願人六名は本殿の正面階段に設けられた神霊移御のための筵道（延べ床）から登場し、直接太鼓台に乗り込んで昇き出すことにしました。古いしきたりは現代にどのように蘇るのでしょうか、例年とは異なった宵宮の催太鼓の雄姿にご期待ください。

◆伝承の復興

柱の間が狭く、催太鼓を昇き出すのは無理なので、この伝承はそれ以前の時代のものでしょうか、前階段の高さなどから想像すると、拝殿から昇き出したのではなく、拝殿前に太鼓台を据え置いて、参拝の後に正面階段を駆け下りて昇き出したのではないかと思われます。

このことから、願人（がんじ・太鼓を打つ乗り手）と昇き手だけは土足の昇殿を許されたと推測され、現代においてもこの伝統は継承されています。

天神祭のどんどこ船行事
大阪府無形民俗文化財に指定

●次代に想いをつなぐ

どんどこ船講では、天神祭を継承する次世代の担い手を育成するため、平成一〇年（一九九八）に子供、どんどこ船を新造し、小若を発足させました。

子供たちに郷土を誇れるお祭りの楽しさを伝えるためでしたが、それは、先代夏風秀之助・当代夏風一嘉講元が七〇年以上にわたり情熱を注ぎ続けた天神祭への想いをつなぐためでもありました。

今度、大阪府の無形民俗文化財に

指定と相成り、これまでの活動が、記録伝承すべきものとして評価されましたことは、誠に喜ばしく、その思いをこれからも老壮若相和し響き合い、ご社頭の隆昌につながることを祈念してやみません。

●記録選択資料の要旨

「どんどこ船」は、天神祭において「なにわの川筋」を縦横無尽に漕ぎまわり、太鼓と鉦で祭の到来を告げるほか、重要な行事に関わるとともに、その掛け声と独特な漕ぎ方を伝承する手漕ぎ船として天神祭に欠かせない存在となっています。競漕もしていた「どんどこ船」の行事は、江戸時代から天神祭と密接な関係を持ち、戦乱等による度重なる渡御の中断を乗り越えて今に伝えられています。

●由来及び沿革

どんどこ船のはじまりについて明確な記録は無く、明治維新や太平洋戦争による渡御の中断もあり、その成り立ちについては定かではありません。現在、わかっている最も古い資料として、天保九年（一八三八）の文献資料（注①）に「どんどこ舟」や「どんどこ連中」の記載があることから、少なくとも江戸時代末頃には存在していたようですが、当時の

の子供、どんどこ船を新造、同一三年（二〇〇一）からは、宵宮に船を陸揚げしての「宮入」、同二年（二〇〇八）からは鉦流神事で流された鉦を取り納める御役目の「御鳥船」を仕立て、同じ宵宮の「宮入」で、御本殿へ鉦を返納する「神鉦奉還式」の御用でもご奉仕しています。

●船の漕ぎ方の特徴

進行方向を背にして漕ぐ逆漕法を基本としていますが、船内に張られた歩板を跨いで半身に構えて座るため、漕ぎ手の身体の正面は船の側面外側を向き、見物人と対面する独特な漕ぎ方を行っています。

●操船の特徴

船を船先の方向に進める「前打ち」を基本に太鼓と鉦の拍子に合わせて「チョーイサ」という掛け声のもと、二十八名が櫂を合わせて漕ぐ櫂捌きは様式化していて美しく、早く漕ぐ、旋回等の指示はその太鼓と鉦の打ち方を変えることで行います。「マエウチジャ」「アトウチジャ」と掛け声を変えて、即座に方向転換させる勇壮さが見どころとなっています。

注①「天満宮砂持見立角力」戊ノ閏四月大新版「天満宮砂持三都役者給金位定見立」（大阪府立中之島図書館蔵）「天保九年砂持寄進帳」（大阪天満宮蔵）
注② 渡御の船列をお迎えする船。

光格天皇と大阪天満宮

大手前大学 准教授 盛田帝子

現在、大阪歴史博物館に寄託されている「光格院御寄附神影」は、天保十一年（一八四〇）十一月に、光格上皇（一七七一一一八四〇）が大阪天満宮に下賜した菅原道真公の御神影である。後水尾天皇（一五九六一一六八〇）の時代に、後水尾天皇の父である後陽成天皇（一五七一―一六一七）の御宸翰の神號と道真公の御神影とが大阪天満宮に寄附されたが、天保八年（一八三七）二月の大塩平八郎の乱の際に焼失してしまつた。大阪天満宮の神主であつた滋岡なるながは、たびたび上京して、高辻家（菅原道真公の男大学頭高視の後裔・儒道・文筆を家業とする）を通じて神影の御下賜を願ひ出していたが、その願ひが通じ、信仰の深かつた光格上皇が、新たに大阪天満宮に寄附したのが「光格院御寄附神影」なのである（大阪天満宮社報『てんまてんじん』55号掲載の拙稿参照）。

ところで、平成二十八年（二〇一六）八月八日、当時、御在位中だった明仁上皇が「象徴としてのお務め

について」というビデオメッセージを発表されたことは記憶に新しい。翌年（二〇一七）六月九日には「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」が成立し、今年（二〇一九）四月三十日には、ご退位されて称号は上皇と定められた。これに先立つ平成二十二年（二〇一〇）秋ごろ、明仁天皇が宮内庁に光格天皇の調査を求められたことが新聞記者の間で話題になった。光格天皇は、約二百年前に譲位した直近の天皇であり、譲位後の光格上皇のあり方についても強い関心をもたれていたという。そこで、宮内庁に光格天皇の調査を求められたのである。明仁上皇は、平成三十一年四月三十日に、光格天皇以来約二百年ぶりに譲位されたが、この日はまた上皇という称号が再興された日でもあるのである（藤田覚『光格天皇 自身を後にし天下万民を先とし』ミネルヴァ書房、二〇一八年）。

大阪天満宮に御神影を寄附された光格上皇とは、どのような方なのだ

ろうか。

光格天皇は、明和八年（一七七二）、東山天皇の孫の閑院宮典仁親王の第六王子として誕生した。第百十八代後桃園天皇の急逝により、安永八年（一七七九）十一月に九歳で践祚、翌年十二月に十歳で即位する。後桃園天皇が崩御されたとき、御子としては、まだ幼い欣子内親王しかおらず、閑院宮家から急遽、光格天皇が皇位につくこととなったのである。

光格天皇は、即位後、後桃園天皇皇女の欣子内親王を中宮とし、朝廷の儀式や神事を復古的に再興し、天皇や朝廷の権威を強化した。学問好きで有職故実にも造詣が深く和歌や雅楽などの芸能にも堪能で、複数の楽器を弾きこなし、宮中に伝わる御所伝授の保持者として宮廷歌壇を領導し、多くの歌人を育てている。

その光格天皇が恵仁親王（後の仁孝天皇）に譲位したのは、文化十四年（一八一七）三月二十二日、四十七歳の時だった。譲位を控えた一月二十四日、天皇としての最後の和歌御会始で、以下のような歌を詠んでいる。

ゆたかなる世の春しめて三十あまり
九重の花をあかず見し哉

題は、光格天皇みずからが出題した「毎年愛花」（毎年、宮中の桜の花に親しみ愛情を注いできた）というものであり、のどやかに豊かに栄えているこの世の春をわがものとして、三十九年もの間、宮中の美しい桜の花を飽きることなく見たことだ、という感慨が詠みこまれている。

光格天皇は在位中、中宮欣子内親王とともに宮中の桜を愛でた。春になると、光格天皇は内裏の参内殿（常御殿の西の御殿。皇族・大臣などが参内する際にここから入る）や禁中渡殿（寝殿造の二つの建物をつなぐ屋根付きの廊下）などで桜の花見をし、紫宸殿の前の南殿の桜をみながら花宴（桜花を觀賞しながら催す宴）を催して和歌を詠んだ。中宮とともに春ごとに宮中の桜を愛でたのである。

光格天皇と中宮にとって南殿の桜には格別な思い入れがあった。光格天皇は、天明の大火で焼失した御所の跡地に、江戸幕府との交渉によって、平安時代と同じ規模の復古的で荘厳な紫宸殿と清涼殿を再建する。新しく造営された御所への遷幸前に、その紫宸殿の前の南庭に植えたのが「南殿の桜」だったのである。南殿の桜は、その後、平安朝のように復古

的に造営された紫宸殿で、朝廷政務を行う光格天皇とともに、すくすくと成長し、毎春見事な花を咲かせた。歴史をふりかえれば、紫宸殿の前に植えられた南殿の桜は、天皇や天皇に近しい者しか見ることのできな

い特別な桜であるため、古来、庶民や武士ではなく、歴代の天皇や公卿の和歌に繰り返し詠まれてきた花でもある。文学の世界では、『源氏物語』「花宴」巻で描かれて以来、南殿の桜は王威の象徴であり、理想とさ

れた延喜・天曆の聖代の王権を懐かしむもの、過去のものとなった王朝文化に対する回顧・憧憬の念をあらわすものとして表現されてきた。

さて、この和歌御会始には、中宮欣子内親王を始め、臣下たちがみな同じ題で歌を詠んだ。この時の中宮の歌は「見ても猶あかずみはしのさくら花いくよのとしの春をちぎりに」（何度見ても、なお見飽きることはない。紫宸殿の正面階段の下に咲いている南殿の桜の花よ。いったいどれほどの長い年月の間、毎春変わらず咲き続けてきたのか）というもので、在位中の光格天皇と共に春ごとに親しみ愛情を注いできた紫宸殿の南階段から見る南殿の桜を詠んだものだ。このとき、中宮の歌は女性の歌であるにも関わらず、関白より上の格として光格天皇御製の次に掲載されている。これは前例のないことであつた。今は亡き後桃園天皇の唯一の御子であつた中宮は、光格天皇歌壇で大変に重んじられたのである。

さて、このように、在位中最後の御会始で、みずから「毎年愛花」という題を出題し、三十九年間、春ごとに紫宸殿で見てきたにも関わらずなお見飽きることのないという南殿

の桜を詠んだ光格天皇と中宮欣子内親王だが、平安時代の聖代（すぐれた天子であつた醍醐天皇、村上天皇が治めた御代）を理想とし、在位中に数々の神事や儀式、平安朝の規模の紫宸殿等を再興してきた。そのような光格天皇にとって、南殿の桜は、王朝文化・雅びに対するあこがれのシンボルとしてのみならず、みずからの在位時代に、王朝時代の文化復興を成し遂げたことへの成功を象徴する存在としてあつたのであろう。在位中の三十九年間、春ごとに咲く内裏の桜を、飽きることなく見てきたという充実感が、御製に凝縮されている。

光格天皇の宮廷儀式の再興や復古への意思は、譲位後も変わらなかった。大阪天満宮への御神影の寄附も、後水尾天皇の時代の意思を継いで再興するという意思の表れではないだろうか。光格上皇は、数々の文化や儀式の復興を成し遂げて、天保十一年（一八四〇）七十歳で崩御する。

なお、本稿の内容は、拙著『日本歌人コレクション77天皇・親王の和歌』（笠間書院、二〇一九年）と重複する部分があることをお断りする。

大阪天満宮の方針により一部表現を改めたところがある。



紫宸殿での光格天皇即位式の図（個人蔵）

お宮参りにいきました

片山 綾

みなさん
初めまして、
あやです。
すごい安産
で生まれた
ので、いき
なり親孝行
をしましたよ



な気分の女の子です。平成最後の天皇誕生日の生まれなんです、それって縁起がいいのかどうか、ようわかりません。

二月十七日の日曜日、大阪天満宮へ初宮参りに連れて行ってもらいました。ほんとと生まれて一ヶ月でいくのですが、寒いとかいう理由で、ちよつと遅くて八週目になりました。さとし兄ちゃんも、二ヶ月をすぎから天満宮で初宮参りだったので、うちのお父さんとお母さんはちよつとのんびりしているのかなあ。

お兄ちゃんの時はついて行かなかったのですが、ひいおばあちゃんもきてくれました。わたしって、お兄ちゃんより好かれてるのかも。

お兄ちゃんは、朝からなんだか機嫌がよくなかったです。お宮さんが

イヤとかじゃなくて、ただ、眠たかっただけみたいですけど。せっかくの本殿でのご祈祷のときもぐずつたので、神主さんも巫女さんもやりにくかったかもしれない。すみませんでした、そんなお兄ちゃんです。お参りが済んで近くの写真館で記念撮影と、お兄ちゃんの時とまったく同じコースです。おねえさんがうまくあやしてくれはったので、とても可愛らしく写ってました。

それから、せっかくだからと、ちよつど開催されていた盆梅展に。わたしはもちろん何もわかりませんでしたが、今年は刀剣も展示してあって、おもしろかったみたいです。

境内にはお店がたくさん出て、猿廻しもありました。ずっと楽しくなさそうにしてたお兄ちゃんでしたが、初めて見た猿廻しはとても気に入ってごきげんになってました。

そうそう、わたしより四ヶ月遅れて、従兄弟のじょう君が生まれまして、じょう君も、天満宮へ初宮参りに行くそうです。おじいちゃんとおばあちゃんにとっては、三回目の天満宮の初宮参り。おじいちゃんは飽きっぽいから、もうええわ、とか言わないかちよつと心配です。

(代筆…祖父 仲野 徹)

浪速菅原吟社詠草

雪菴 松村曉二撰

平成最後の御宸題は「光」と言う事で詠物体の形で詠みました。

一月課題 御題 光

傲水 上田 清文 東大阪

新春暁輝満 如湧日瞳瞳

天路三光裡 人寰一照中

(訓読) 新春暁輝満ち、湧くが如く日瞳々。天路三光の裡、人寰一照の中。

(通釈) 新春の早朝の光りが満ちあふれ、日輪が湧きあがるように昇った。天には日と月と星の光が瞳あり人間世界を照らし育んでいる。

二月席題 神苑観梅

苔菴 揚田 崇徳 分韻 広島

菅公靈廟隔塵寰 殘雪已消心自閑

神苑探梅春意動 出幽黃鳥語綿蠻

(訓読) 菅公靈廟 塵寰を隔て、

殘雪已に消え心自ずから閑なり。神苑梅を探れば 春意動き、幽を

出ず黄鳥 語綿蛮たり

(通釈) 天満宮の社殿は俗世間とかけ離れていて、名残の雪も消えて心は自然と閑かです。神苑の梅を探れば春の気配を感じ、鶯の鳴き声が微かに聞こえました。この詩には先賢(藤澤黄坡)詩に基づいて作っています。

ます。

三月課題

書窓獨坐

豊陽 荒木 英一 奈良市

庸才覓句坐寒齋 未足投詩推敲佳

作賦工文貧士樂 北窓春色信風諧

(訓読) 庸才句を覓め 寒齋に坐し、未だ詩を投ずるに足らざるも推敲佳なり。賦を作し文を工にする

は 貧士の楽しみ、北窓の春色 信風諧(やわ)らぐ。

(通釈) 平凡な才能が句をもとめ粗末な書齋に坐り、詩を投稿するには十分ではないが推敲は重ねている。詩賦文を工作するのは貧士の愉しみであり、北窓も春の気配の花信風が吹き出した。

四月席題 古刹幽庭

未醒 梅津 史子 京都市

花開花謝石庭寒 紅委苔茵春欲殘

空戀蝶飛徊寶塔 青楓葉展白雲端

(訓読) 花開き花謝す 石庭寒なり

紅は苔茵に委ね 春残さんと欲す。空しく恋う蝶は飛びて宝塔徊る、青楓葉展ぶ 白雲の端。

(通釈) 花が咲きそして散る、石庭散った紅の花びらは苔の青さにゆだねるようだ。胡蝶がひらひらと恋をするのか石塔のぐるりを飛んでいる青青とした楓の葉は白雲の端にのべられているようだ。

天満天神繁昌亭 リニューアル

当宮が敷地を提供しています「天満天神繁昌亭」がリニューアル・オープンいたしました。

七月一日正午より本殿において繁昌亭のリニューアル工事の完了奉告祭が斎行され、施主として上方落語協会の笑福亭仁智会長と六代桂文枝



前会長、以下一二〇名が参列して大前に工事完了を報告して参拝されました。

参拝後は、繁昌亭前のオープンセレモニーに移り、寺井宮司も参加してテープカットや鏡開きが行なわれた後、約三〇〇名の観客に樽酒が振る舞われ、リニューアルをお祝いました。

繁昌亭は、去る平成十八年九月の開業から一三年を経て、空調設備の劣化など数々の不都合が見受けられ

第二十二回

あの人もこの人も



今回は、当宮の境内にある文化教室「梅香学院」の書道科講師である川端比侶子(秀苑)先生をご紹介します。

梅香学院は、当宮の西側にあり、昭和二十九年に当所は花嫁修行の学校として計画され、大阪府認可の学校として開校いたしました。

現在は文化教室として運営されて

いる梅香学院では、川端先生の書道科をはじめ、和裁科・茶道科・着付け科など、男女問わず、多くの方々が、古き良き日本の伝統文化に関心を持たれ、学ばれております。

また当宮では、毎年書き初め展覧会を開催しており、来年は四九回を迎えますが、川端先生は、書き初め展覧会の審査員もして頂いております。書家の西本支星(しせい)先生に師事された川端先生は、特に仮名の腕に長けておられ、長年、当宮の書き初め展覧会の審査員にも推挙されました。

川端先生は、かつては読売書道展の理事や、仮名書道会 千草会(ちぐさかい)の理事をされており、現在は、日本書芸院の一科審査員、日本書写技能検定協会の大阪府審査員をされており、現在でも梅香学院のほかでも、多くの教室で指導されておられます。

先生は、今年八十三歳をお迎えになるそうですが、日本書道界における仮名の第一人者として今なお活躍されております。

来し方をふりかえって(二)

大阪天満宮名誉宮司 寺井 種伯

母、徳子のこと

母は、私の祖父である黒住宗子（黒住教四代教主）と祖母小野曾子（むねやす）の長女として、明治三十三年（一九〇〇）一月二十一日に生まれました。

小野家は旧男爵家で、島根県出雲市大社町の日御碕神社の宮司家でした。ですから小野家は出雲の千家さん（出雲大社宮司家）とも交流が深かったようです。

祖母は、その小野家から黒住家へ嫁入りし、母を産みましたが、その二週間後に亡くなるんです。その後、祖父宗子は、後妻を迎えたのですが、その後妻さんが出雲の千家さんの娘さんでした。私の家内紀美子も出雲の千家さんから来てくれましたので、これも御神縁ですね。

祖父にしてみれば、実の母親を亡くした母徳子（むねこ）のことが、かわいそうだったようで、母は非常にかわいがってもらったそうです。母がちよっとひ弱であつたようで、小学校に行く時も、人力車で通学をさせてもら

つたらしいんです。そんな母でしたが、父種長と大正十一年二月に結婚し、六人の子供を授かったうえ、百歳の長寿を全うしました。

平成十二年の二月五日、母の生母曾子の百年祭を、岡山の黒住の本家でされるとのことでしたので、母もお参りする予定にしていたんです。岡山までは、ベッドを設えた車で行く予定でした。そのため、こちら（天満）に、黒住に嫁いだ姉博子や、みんな集まってくれまして。しかし出発の日（四日）、母は亡くなってしまいました。前日まで元気に行っていました。前日です。……

「お母さん、生みの母のもとへ、そんなに急がなくてもいいのに」と言った覚えがあります。

お世話になった「なつさん」

父が名和神社（鳥取県）の宮司として奉職していた昭和八年、四番目の子として生まれた私に、秋樹なつこさんという人が、お守りとしてきてくれました。忙しい両親でしたから

ね。なつさんは、名和神社、貫前神社（群馬県）、海神社（兵庫県）と、ずっと私についてくれて、本当にかわいがってくれました。子供やっただからそう見えたのかもしれないが、なつさんは大きな女性でした。

私が高校の時にね、懐かしくなって、鳥取県になつさんを訪ねたことがありまして。そしたら「ああ、のりぼっちゃん」言うてね、えらいもてなしてくれはつてね。

なつさんのご主人というのは、郵便局長さんで、元軍人さん、陸軍の伍長さんだつたと思います。鳥取県大山町御来屋の人でした。なつさんのことは懐かしく、お顔は今でもはっきり覚えています。

森鷗外翁下賜の時計でお勉強

昭和十一年、父が貫前神社から海神社宮司として着任した時、私はちょうど満三歳でした。翌十二年に一番下の妹が生まれ、兄弟は六人になつていました。

その頃、幼稚園に通っていた私の思い出に、父との「時計のお勉強」があります。

海神社の宮司室に、「森鷗外閣下から頂戴した」という時計が置かれていました。父が宮内省の図書寮に



種伯名誉宮司 五歳の頃
兵庫県垂水の浜辺(宮司職舎前の浜辺)にて

勤めていた時、鷗外翁は図書頭をされていました。時計は、父が図書寮を退官し、これから神職の道に進むという時に、鷗外翁から「しっかりやりなさい」ということで頂戴したようです。この時計は今も家にあります。

私は、幼稚園の帰りや、休みの日に父のいる宮司室によく行きました。行くと、父が鷗外翁の時計の針を指でくるくるっと動かし、私に「今何時や？」とたずねてきます。それを当てる時、お菓子やうどんなどを食べさせてもらえます。ご馳走が食べられる！、と思って、ウキウキ気分です。父の宮司室を訪ねました。

（聞き手 文化研究所 近江・宗巳

日本を美しくする会
大阪掃除に学ぶ会

大阪天満宮お掃除

去る四月二一日（日）、「日本を美しくする会・大阪掃除に学ぶ会」は、毎年恒例となっている大阪天満宮のお掃除を実施させて頂きました。

今から五年前に大阪天満宮氏子総代の盛岡様に大阪天満宮様をお掃除させて頂きたいという意向をお伝えしましたら、快く大阪天満宮様にお話を通して頂きました。それを受けて、後日に大阪天満宮様にご挨拶とご説明に伺いましたところ、お掃除の内諾を頂きました。

これをきっかけに毎年四月の日曜日に当会のメンバーによるお掃除の会が始まりました。私たちにとって大阪の顔とも言えるべき「天神さん」のお掃除が出来ることは大変な喜びであり、また「清浄」を最も大切にする神道での活動は有難いことです。初年度（平成二十七年）の参加者は、三五名でしたが、五回目となった今年はミャンマーからの留学生や和歌山・京都・奈良からも仲間が駆けつけてくれ、七二名が一二班に分かれ



てお掃除を楽しみました。開催が日曜日の早朝にも拘わらず大勢の方が当活動に共感を覚えてくださり、年々確実にこの活動が広まりをみせていることに心から感謝を申し上げます。

また今年からは光栄なことに数名が本殿に上がらせて頂き、拭き掃除の担当もお任せ頂きました。実際に私たちが広い敷地の天満宮様の境内や本殿、ならびにお手洗い等をお掃除してみると、日頃から神職に携わる方が本殿を含み境内を毎日お掃除

されていることの大変さがよく分かります。

集合した時点では大したゴミがないように見えたのですが、各班が境内の担当エリアを丁寧にお掃除し、最終的には落葉を含めて大きなゴミ袋に二八袋ものゴミが集まりました。

更には床がピカピカに磨き上げられている本殿でも、渡り廊下の桟などは多少埃がついていたり、排水溝の中は砂や落葉が溜まっていたりしました。目には見えにくい所を清浄化することによりその周辺の邪気が払われて、空気が透き通ると言われておりますので、大勢の参加者が集い楽しみながら「徹底したお掃除」をすることの意義は大きいと実感しております。

お掃除終了後には天満宮様のご厚意で本殿で正式参拝をさせて頂きました。その際に祭儀部長・柳野様が「場を清めることは心を浄化することに通ずる。それにより日々目に見えない加護を受けておられるのではないか」とおっしゃって下さいました。決して掃除の功德を過度に期待して当会は活動しているわけではありませんが、自分の為ならずとも世の中や自分の周りの方のお役に立つ生き方をして人生を豊かにしたいと



代表世話人 下 正晴

今後も大勢の方の清々しい笑顔がはじけるように、一人でも多くの方にお声掛けをして大阪天満宮のお掃除の会が「大阪の風物詩」となる日を目指します。そしてこの良きご縁に心から感謝して、末永くご指導・ご支援を賜りますようお願いして御礼の言葉とさせて頂きます。

大阪天満ライオンズクラブ 星合之池石碑 御奉納

梅花の薫りも芳しく漂う去る三月七日、大阪天満ライオンズクラブ認証五十五周年記念として「星合之池」石碑の御奉納を賜りました。

大阪天満ライオンズクラブは、常日頃から、天神祭への御奉仕をはじめ、えびす祭など当宮の年中諸行事にも御奉仕頂いております。

このたびの建碑により、多くの参拝者がこれまで以上に星合之池を訪れ、益々賑やかになりますことを期待致します。

「星合之池」は、現在、堀川小学校の校庭に位置する「七夕池」と、いまはなくなった「明星池」とを合わせて「天満三池」と呼ばれました。この三池の呼称は、この辺りが星辰信仰の盛んな地であったことを伝える貴重なものです。

また、星合之池に架かる愛嬌橋に



は、この橋上で出会った男女は、結ばれるという言い伝えがあります。

現在、星合之池畔では「星愛七夕まつり」も御斎行され、良縁成就のパワースポットとしても近年注目を集めています。

末筆ではございますが、大阪天満ライオンズクラブの皆様方には、篤く御礼を申し上げますと共に、貴クラブの御発展並びに、会員の皆様方の御多幸と弥益々の御活躍を心より御祈念申し上げます。



天満宮スカウト活動日誌 平成三〇年二月～令和元年六月

天満宮スカウト合同行事

- 一二月 天満宮スカウト育成会餅つき大会・大阪天満宮・四条畷神社大晦日奉仕
 - 一月 元始祭参列・天満天神えびす祭奉仕・天満宮スカウト新年参拝及び互例会
 - 二月 天満宮スカウト育成会・観梅会・なみはや地区BIP祭参加
 - 三月 九八団合同スポーツ大会
 - 四月 入団上進式及びフライアップ式
 - 六月 天満宮スカウト育成会総会・大阪府神社スカウト協議会合同行事
- ### ボーイスカウト大阪第九八団 四月
- ビーバー隊 堀川まつり・こどもカーニバル参加
 - カブ隊 基本訓練
 - ボーイ隊 国旗掲揚・火おこし
 - ベンチャー隊 年間計画企画会議
 - 五月
 - ビーバー隊 母の日の工作・ビーバーカーニバル参加
 - カブ隊 ハイキング・一泊キャンプ
 - ボーイ隊 料理・ロープ技能・

班キャンプ
ベンチャー隊 武蔵野探索企画（目的・目標・概要）・進級課題履修
六月
ビーバー隊 クッキング
カブ隊 科学教室
ボーイ隊 構築

ガールスカウト大阪府第八二団

- 四月 フライアップ式・パトロール編成・備品整理 活動オリエンテーション・緑の羽根募金・大阪子供カーニバル参加
- 五月
- テンダー・ブラウニー部門 テント構築・ロープ技能履修・料理
- ジュニア・シニア部門 野外料理・テント構築・ロープ技能履修
- 六月 一泊訓練キャンプ



英国首相御夫君 フィリップ・メイ氏 来宮

去る六月二八日～二九日に開催されたG20大阪サミットに伴い、参加国である英国首相メイ氏の御夫君フィリップ・メイ氏が二十八日午前当宮へお参り下さいました。

本殿参拝後は、寺井宮司とともに天神橋筋商店街へ向かわれ、名物の「コロッケ」を美味しそうに召し上がっておられました。

フィリップ・メイ氏 来宮

また、同日午後には、同じく英国の記者団が当宮を詣で、参拝後は商店街へ向かわれ、それぞれに楽しんでおられました。

人事任免

《総代委嘱》

去る六月四日付で当宮総代を委嘱致しましたので、ご報告させて頂きます。



新名 和也

新禰宜（四月一日付）

沖 圭司
津江 憲典

大阪天満宮献詠 風月社

令和元年上半期秀歌

春萬葉のみやひの花そ咲きつつけ

令和にかよふ御代の始まり

幹事 佐野 秀子

天満の神にそ祈る令和なる

御代に栄ゆれとまこころこめて

幹事 松村 暁二

春の雪コントラストのあさやかさ

見渡すかきり葉の花畠

堺 永田 民子

仕事始め鋤にお神酒をかけ父は

柏手を打ちて豊作祈る

東大阪 中山 里江

若葉萌へ小鳥はうたひ花ひらく

令和は栄ゆるこの幕明けを

神戸 鈴木 敬子

一斉に大き手をあけ潮まねく

蟹は満干の音頭とりかも

大阪 金生 久夫

一万坪の畠に植えらるビオライラの
種子の花みつ舞洲の空

大阪 西脇 かつ津

年はしめ夢に出てこよ宝船

七福神の弁天のせて

大阪 大北 滋保

種子覆ふやはらかき土乾かさぬ

育み見守り花ときを待つ

大阪 中瀬 央子

年号も令和となりて氣も潔く

短歌の世界さらに深めむ

大阪 竹久 英子

いつ止むと知れぬ春雪うけつつも

托鉢僧らの足は乱れず

大阪 家治 綾子

立山に白き雷鳥ひそみをり

春の雪ふる岩かけ静か

東大阪 乾 恵子

闇ありて始めてかかやくオリオン座

われのころの指針となさむ

東大阪 北岡由紀子

いつしかと急くころに花までは

咲かぬ梢に淡雪そふる

東京 御手洗靖大

義父まきし言葉の種のめはえもゆ

育ちゆかむと今日のうれしさ

大阪 伊藤 凉子

平成の名残の春の導きの

結ぶえにしと我が歌の種子

八尾 南口二美

新たななる種の育ちのよろこひを

子のにきやかし声に重ねむ

大阪 駒川 里美

蟹さへも甲羅に似せて穴を掘り

かくあらまほし人の心も

禰宜 柳野 等

「天神祭」発行

今年も、日本郵便(株)からオリジナルフレーム切手「天神祭2019」が発行され、市内の全郵便局で発売中です。



① 切手も写真撮影や複製等に耐えます。ご利用ください。
② 郵便局では、切手としてご利用いただけます。
③ 郵便局で買切れた切手は、この冊子もご利用いただけます。切手は、郵便局で買切ることができます。

同切手は、去る平成七年から適宜発行し、今年で八回目になりますが、今年の図柄は、上部に大きく「奉納花火」を配し、十枚の切手には、「鉦流神事」「宮入り」「陸渡御」、「船渡御(二枚)」、「大阪天満宮」「御迎え人形(三枚)」「御鳳輦図」を選びました。このうち船渡御は「大篝船」と「ど

んどこ船」、「御迎え人形」は「豆蔵」「鬼若丸」「八幡太郎」です。この御迎え人形三体系は、本年の「御迎え人形スタンプラリー」に合わせて当宮の本殿東側の参集殿廊下に飾られます。切手シート片手に、本物の御迎え人形と見比べて頂ければと思います。

編集後記

まずは、令和初の社報となった本号で、天皇陛下踐祚改元奉告祭と御即位奉祝行事を報告できますことを、皆様とともに慶びたいと思います。顧みしますれば、本社報の創刊は大正一三年(一九二四)のことでした。その後二回の休刊時がありましたが大正・昭和・平成を経て令和元年に九五年度の七六号を発行できますことも嬉しい限りです。

さて7頁に、天神祭の「どんどこ船」が大府の無形民俗文化財に指定されたことをご報告しましたが、天神祭としては、先に太鼓中の「催太鼓」が同文化財に指定されています。

できれば天神祭そのものが文化財として認められることを願っているのですが。

大阪天満宮社報

てんまてんじん 第76号

令和元年7月10日印刷

令和元年7月12日発行

発行人 寺井種治

発行所 大阪天満宮社務所

〒530 0041 大阪市北区天神橋2-1-8

TEL 06-6353-0025

印刷所 木村印刷株式会社